宮古における鍛冶伝承

下地　和宏

はじめに

先島の先史文化は、縄文・弥生文化はもとより沖縄諸島の先史文化の影響を受けることなく独自の文化圏を形成していた。どちらかといえば南方系の先史文化の要素を持つ文化圏であった。

10～11 世紀頃から日本の文化が琉球列島に押し寄せ、これまで異文化圏であった奄美・沖縄諸島と先島諸島が文化的に統合され、琉球文化圏が成立するようになる。考古学でいう「グスク時代」にあたる。歴史学でいう「古琉球」と一部重なる。

この時代は新しい文化を携えた渡来人が、琉球文化圏に出入りしたことがうかがわれる。各地域に残る渡来人伝承は、その反映とみることができる。鍛冶伝承も渡来人伝説を抜きにすることはできないであろう。その流れの中で、いわゆる炭焼き長者の伝説もとらえることができよう。

グスク時代の人々の動きは広域的かつ躍動的で、人口も急激に増えた時代である。鍛冶伝来による農具等の普及が農耕文化を推進し、渡来人の定着化を誘引したとも考えられる。

本稿では、宮古の鍛冶伝承を紹介し、その背景となる時代を考えることにします。

1　鍛冶神の多良間島渡来

多良間島のフイゴ祭は、かつて毎年旧暦 11 月 7 日に神迎えの行事があり、10 日にお送りした。しかし、現在この祭はないが、「鍛冶神（かずがん）のニリ゜」が残されている。このニリ゜は、フイゴ祭の時、鍛冶屋が住んでいた旧跡で歌われていたという。鍛冶神のニリ゜は三つある。その一つは鍛冶の伝来を歌い、二つめは島での鍛冶のはじまりを歌い、三つめはお送りの日に歌い、鍛冶神の業績をほめたたえたものである。

ここでは、鍛冶神が日本島から沖縄島に渡り、宮古島、多良間島に渡った、という最初のニリ゜を紹介する（『村誌たらま島―孤島の民俗と歴史』1973 年　416～419 頁）。

歌　詞	意　味
１．鍛冶神　がなすど	鍛冶神の　ことです
しゃふぬ主　がなすど	細工の神の　ことです
２．まぱずみぬ　生（んま）りわーい	神が　お生まれになったのは
やまと島　んまりー	大和で　お生まれになった
３．やまと島　まんなん	大和の中央で

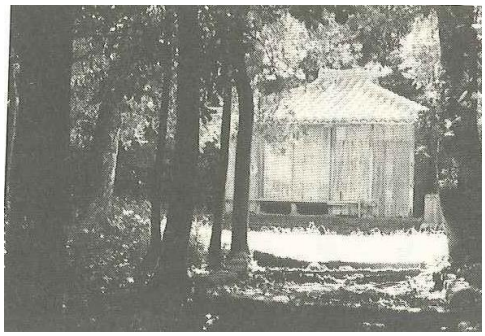
日本島(にふんずま)　まんなん	日本の　中央で
４．かに盛(むい)ぬ　三(み)むい	鉄を盛り積んだ　三つの山から
かにむいぬ　むいから	鉄塊を　盛り置いた中から
５．生(んま)り　わーらまい	お生まれになった
はるき　わーらまい	その鉄塊の中で　お歩きになった
６．うぷふきば　つふぁまい	大きなフィゴを　おつくりになり
うぶかんか　盛(む)らまい	大きな金敷を　おつくりになり
７．うぷつとば　つふぁまい	大きな鎚を　おつくりになり
つとがまば　つふぁまい	小鎚を　おつくりになり
８．うぷぱすば　つふぁまい	鉄の箸を　おつくりになり
かずどぅば　つふぁまい	鍛冶道具を　おつくりになって
９．なぎふとう　ピラを	一尺の　へらを
はばゆくで　ピラを	幅も四寸ほどの　ヘラを
生(な)らしど　わーらまい	はじめて　おつくりになった
10．やまと島　しゅだて	こうして大和島に　鍛冶を広め
日本島　しゅだて	日本を　発展させて
また育(しゅだ)てで　やりば	まだ鍛冶を　広めたいと
11．船がまば　うしゃき	船を　用意され
ぴやさぎば　うしゅき	船を　お出しになった
12．船がまぬ　荷物や	船の　荷物は
ぴやさぎぬ　荷物や	積みこんだ　荷物は
13．鍛冶道具(かずどう)ば　荷(に)ゆし	ほとんど　鍛冶に使うものばかり
しゃふどうば　荷ゆし	すべて　鍛冶道具であった
14．沖縄島(うきなずま)　んみやい	沖縄島に　渡り
按司元(あじもと)　んみやい	按司の島に　渡り
15．うきな島　育て	沖縄島にも　鍛冶を広め
にすぱいば　しゅだて	北から南まで　鍛冶を教え
16．育て　わーしからや	沖縄で　広めたあとは
また育てで　やりば	まだ広めたいと　お考えになって
17．船がまば　うしゅき	船を　用意され
ぴやさぎば　うしゅき	船を　出されて
18．宮古島(みゃーくずま)　んめい	宮古島に　渡り
殿平良(とぬぴさら)　んめい	中心地平良に　行かれて
19．みやーく島　そだて	宮古にも　広められ
にすぱいば　育て	北から南まで　鍛冶を教えて

20. 育て　わーしからや　　宮古の普及を　おわると
　また育てで　やりば　　まだ広めたいと　お考えになって
21. 船がまば　うしゅき　　船を　用意され
　ぴやさぎば　うしゅき　　船を　出されて
22. 多良間島（たらまずま）　渡（ばた）り　　多良間島に　お渡りになった
　三原島（みばらずま）　ばたり　　三原島に渡って来られた

やまと島（日本島）で生まれた鍛冶神は、大鞴（ふいご）や、大金敷、大鎚、小鎚、鉄の箸などの鍛冶道具を拵えて、長さ一尺、幅四寸程のヘラを作り、鍛冶を教え広めた。沖縄島に渡り同じように教え広めたので、更に宮古島、多良間島まで広めた、と歌われている。
稲村賢敷はその後の鍛冶神に触れて、宮古・八重山に伝わる伝説を次のように紹介している（稲村賢敷『宮古島庶民史』三一書房　新版 1972 年　61 頁）。

なお鍛冶神は更に八重山島に渡り、最後に与那国島に渡られたが、彼は全身が黒鉄を以て作られ強力無比であったが、頸部に僅か一寸角位の肉身があるだけであった。彼は与那国でずいぶん兇暴で一般の恐怖の的となり、彼の妻はその睡眠中を窺い匕首を頸部の肉身に突き入れて漸くこれを殺害することができたが、これで鍛冶神は与那国島で止り、それより西には渡らなかった、という。

多良間島では毎年旧暦 4、5 月頃、「すつうぷなか」という豊年祭が行われる。この祭は、ういぐすく金殿（かんどぅぬ）が始めたと伝えられる。祭はナガシガー、フダヤー、パイドニ、アレーキの四か所の祭場で行われる。祭では「かでかりぬニリ゜」のあと「ういぐすく金殿がニリ゜」が歌われる。粟の種まきに始まり収穫までを詳しく歌っている。ういぐすく金殿は農業の神として祭られているが、大和から渡来した鍛冶の神でもあるという。金殿という名称が鍛冶神であるとする。ういぐすく金殿の屋敷跡とされる場所から南に坂道を下ると、島民の最も信仰厚い運城（うんぐすく）御嶽に行きつく。この運城御嶽は、ういぐすく金殿の祭祀を行う斎場で、また、「うんぐすく」は「うえぐすく」から転訛した、とする考えもある（稲村、前掲書、57 頁）。それ故か、「旧記」および口碑にも登場しない「うえぐすく金殿」を運城御嶽の神名であるとする（同前、148 頁）。運城御嶽は、「雍正旧記」（1727 年）に収録されているが、その由来は記述されず、「神名おとらふせらい神のふせらいと唱」と神名を記述するにとどまっている（『平良市史』第 3 巻資料編　1981 年　52 頁）。


運城御嶽（多良間村史より）

2　鍛冶神の伊良部島渡来

伊良部島には大和および久米島から渡来した鍛冶神の伝承がある。「雍正旧記」(1727 年)に長山御嶽と比屋地御嶽が収録されている（前掲書『平良市史』第 3 巻　150 頁）。以下、その記述内容を取り上げる。まず、長山御嶽について見てみよう。

長山御嶽　男神かねとのと唱候。但、鉄を持渡り候故、かねとのと唱申し由候。
右由来は、昔当島鉄無$_{レ}$之、耕作之働も牛馬の骨を以て、とやかく仕候処、大和人漂着仕、鉄持渡り、長山に栖居、農具打調村中へ相渡し候付て、作業漸くはかどり五穀致$_{2}$満作$_{1}$人民豊に渡世仕候付、作物之神を祭、大和人の跡を弔、村中、中古迄は祭申候事。

長山御嶽　（佐藤宣子撮影）

この伝承は、「鍛冶神のニ゜リ」に歌われる宮古島に渡来した鍛冶神が、鍛冶の技術を教え広めた情景を連想させるが、沖縄島を経由せずに漂着という形で渡来している。海での遭難事故は想定できる出来事であり、漂着というケースでの伝来もあり得たのであろう。死後は鍛冶の神「かねどの」として祭られていることから、宮古に定着した渡来人の一例であろう。どのような理由によるものか、「中古」までは村中で祭っていたのに、その後は祭られていない。大和人のおかげで人民は豊かに暮らすことができるようになったというのに。村人が離散し、村が消滅したのであろうか。「旧記」でいう中古とは、15 世紀前後頃と考えられる。次に比屋地御嶽について見る。

比屋地御嶽　男神あからともかねと唱。
右由来は、昔神代に、久米島より御神兄弟渡海にて、弟神は比屋地之神となり、兄神は八重山島おもと嶽の神となりたる由候。
右神御縁を以、八重山、宮古前代より為$_{レ}$致$_{2}$通融$_{1}$由候事。

比屋地御嶽　（佐藤宣子撮影）

この伝承は、沖縄・久米島から兄弟神が宮古に渡来、弟神は伊良部島に止まり、兄神は更に八重山島に南下する。兄弟は両島で神として祭られ、その故をもって宮古と八重山は交

通することになった、という。この伝承の伝える内容だけでは、久米島から渡来した兄弟神が鍛冶の伝来とどのようにつながっているのか見えにくい。弟神が比屋地に止まった目的が不明であるが、神名を拠り所にして鍛冶を伝えることに結びつけている。

神名の「あからともがに」は、赫々として灼熱する鉄を打ち出す鍛冶の神の義で金殿神であるが兄おもと岳神に対して弟神であるからから「ともがに」と称した（稲村、前掲書、147 頁）と理解されている。

3　鍛冶神の宮古島渡来

宮古島にも大和および久米島から鍛冶渡来の伝承が伝えられている。「御嶽由来記」（1705 年）に収録された船立御嶽（平良字西仲宗根）と嶺間御嶽（城辺字友利）の伝承である。以下、その概要を記述する（前掲書『平良市史』第 3 巻　32 頁）。

船立御嶽

船立御嶽　男女神かねとの・志らこにやすつかさと唱。

船路の為並諸願に付、平良村中崇敬仕候事。由来。昔神代に久米島按司という人に一人の娘あり。七歳の頃より朝夕、月天日天を願ければ、天道感に応え、則ち自在通を得て、万事の吉凶一事も不レ違占い申候。此家に嫁有りけるが、邪見放逸なるもので、彼の娘のことをうらやみ、如何にもして失せん事を計り、父の按司へさまざまの讒言をかまい、此娘へはよなよな忍男参り候と空言進み申し候。父誠なると心得、大に怒を成し、汝こころ直なるものならば、人住む島に付き、こころ悪しきものならば、鬼界ヶ島に付きとて、小舟に乗せ沖へ押出し申候。兄有けるが、か様に過もなきものを邪見なる嫁の讒言を信じ情なく流し失せんこそ高見けれ。我も妹諸共に死んにば志かすとて、小舟に泳掛り、なくなく天を祈り、浮ぬ沈ぬ風儘に寄り申し候。天の御護にや翌日の朝漲水津に寄り付、御嶽に詣で身の行衛を祈り申し候。其夜の夢に、汝過なくして此島に流れ来りこそ不便なり。平良のうち船立と申所は所柄能く、居せ志め可、然由示現を蒙り、則ち船立に尋行き、苫屋を作り、兄妹住居申候。朝な夕な、里ひとの水を汲み、薪木を荷い、なけき暮しなきあかし由候。彼の娘こころさまやさしく、姿形も麗はしきものなれば、すみや里かねこ世の主と申人おもいをかけ、連理のかたらいの中に九人の男子を産み、此子共成人仕こころかさ有ものにて、何卒母方の祖父に現相すんとて、船を拵い母を乗せ久米島に上り対面仕候。父の按司も先非を悔い、親子の愛を尽し、ころかね、巻物、段々に引出物を賜り、宮古島に帰し申し候。其先は宮古島にはくろかね多く無レ之、牛馬の骨などにても田

畠の働仕候故、五穀不レ実、年々飢饉に及候処、其兄賢きものなりば、鍛冶を工し、へら、かまを打出す。東(農か)作業思様に相達せ、世間豊饒罷成り申し候。然らば万民飢を凌ぎ安楽に志めること、彼の兄妹恩沢故とて、則ち兄妹の骨を船立山に納め、一社の神と崇め為レ申由、云伝有り、崇敬仕候事。

この船立御嶽の伝承は、鉄を携えて渡来した人々とは趣を異にする。讒言により島流しの憂き身にあった娘が宮古島で結ばれ、子孫を残す。子どもが成人した後、母子で久米島の祖父を訪ねた。父は讒言を信じて島流しにした前非を悔い、宮古への帰りに際してくろかね（鉄）や巻物（鍛冶秘伝書か）などの引出物を娘に与えた。兄は持ち込んだ鉄でへらや鎌などの農具を拵えて住民に与えたので、以前とは違い五穀豊穣になった。兄妹の死後、村人は兄妹を船立山に葬り鍛冶の神、農耕の神として御嶽を建て、兄を「かねどの」、妹を「しらこくにやすつかさ」と唱えた。船立御嶽では、毎年旧暦 11 月 8 日には島内の鍛冶屋や鉄器を扱う者などが集まり「フイゴ祭」を行っていた。

次に城辺地域の嶺間御嶽を見ることにする。

嶺間御嶽　男女神あまれふら・泊主と唱。

船路の為並諸願に付、城辺の四ヶ村崇敬仕候事。由来。昔神代に友利村後あまれ山の下に僅成孤村有り。或夜、四海浪あがれ民屋致 1 滅亡 2 一村荒原にぞ成にけり。然処、あまれ大津かさと申人一人遁 2 波難 1 あまり山の岸の上に草庵を結び、只独住居由候。其時、大和人平安名崎宮土と申浜に致 1 漂泊 2 人家を尋行き、彼の大津かさに参逢、夫婦の縁を結び子孫繁昌仕、是より又あまれ村始めて立為レ申由候。嶺間山は、彼の夫婦根所と云伝有り、崇敬仕候。あまれ村は今は無レ之候事。

嶺間御嶽

この伝承も見る限り鍛冶伝承とは何の関わりもない。漂着した大和人が島の娘と結ばれ子孫繁昌し、津波で流失した村を再興した、という話である。「御嶽由来記」に収録された由来ではあるが、王府に報告された以外の民間口碑があったのであろう。その口碑によると「大和神かんか主」と唱え祭っているという。かんか主は鍛冶の神のことで、漂着した大和人は、鍛冶の技術に長じ、鍬やへら、鎌などの農具を作って住民に分け与えたので、後に鍛冶神として祭られたという（稲村、前掲書、146 頁）。

鍛冶の伝来に関わったとされる御嶽について、その伝承を紹介した。王府に報告された「御嶽由来記」や「雍正旧記」に見る限り、鍛冶伝来の由来を記述しているのは、船

立御嶽と伊良部長山御嶽の二か所である。鍛冶を伝えた人々は大和島と久米島から渡来した。へらや鎌などの農具を拵え住民に与え暮らしを豊かにさせている。

嶺間および伊良部の比屋地、多良間の運城の三御嶽は由来からだけでは、鍛冶の伝来とは結びつかない。金（かに・かね）のつく神名からは鍛冶の神と見なされている。「旧記」に記載されていない神名でも、民間口碑として残されていることから、それを拠り所としている。嶺間御嶽は「大和神かんか主」（口碑）、比屋地御嶽は「あからともがね」、運城御嶽は「ういぐすく金殿」（口碑）が神名であり、いずれも鍛冶の神あるいは農業の神として祭られているという。

4　炭焼太良の話

日本各地で伝えられている炭焼き長者の話は、柳田國男によれば「豊後［大分県］で起こったことは疑いがない炭焼きの出世譚」（柳田國男　定本『柳田國男集』第一巻、筑摩書房、1978 年、318 頁）という。炭焼長者の話を、大雑把にすれば、人里離れた山奥で木炭を焼いて暮らす貧しい男が、思いもよらない娘との結婚で、億万長者となる出世譚である。

柳田國男は日本各地に伝わる炭焼き長者の話の共通点を次のように四点に要約して述べている（柳田、前掲書、319～320 頁）。

第一　きわめて貧賤なる若者が、山中で一人炭を焼いて居たこと。豊後では男の名を小五郎という。

第二　都から貴族の娘が、兼て信仰する観世音の御告げに由って、遙々と押掛け嫁にやって来る。

第三　炭焼は花嫁から、小判又は砂金を貰って、市へ買物へ行く途次がら、水鳥を見つけてそれに黄金を投げ付ける。それがこの物語の第一の山である。

第四　則ち愉快なる発見である。投げ棄てた小石が大切な黄金ならば、炭焼く谷々に山ほどある。それを拾って来てたちまち長者となった。

以上の四つの要点のうち、少なくとも三つまでを備えた話がすでに十いくつかあり、「沖縄の諸島、殊に宮古島の一隅にまで、若干の変化を以て、疑いも無き類話を留めて居るのである」と強調している。

柳田のいう「疑いも無き類話」というのは、「宮古島記事仕次」（1748 年）に収録された「西銘嘉播の親長井の里の真氏を娶事」であろう。その前後の「野崎長井の里の真氏誕生の事」、後段の「嘉播の親子共三兄弟不孝行の事　附孝女両人父を迎えし事」の三つは一連の話（伝説）である。以下、炭焼き長者の類話とされる炭焼太良の話を述べる（「宮古島記事仕次」、前掲書『平良市史』64～65 頁）。

（梗概）野崎村の長井の里という処の両家で、男子と女子が生まれた。化神は、女子は産家の業が早いとの理由で、日に粮食七舛の福を与え、男子はその逆だったので、日々に乞食の貧相なるとした。この故をもって子孫誕生の時は、早々と生子の額に鍋ふす粉を付るという。

二人は年頃になったので、夫婦の縁を結び富貴栄耀の家となった。新麦の初祭に麦を煎て粉にしたものを煎米といって賞味する世俗がある。ある時、夫に煎米を与えると腹を立てて投捨ていろいろ悪口した。妻真氏は蔵に入り忙然としていた。夜半頃、異形の者が来て、「汝の夫は淫欲ふかいので別人を妻にして、汝は離別される」という。「我等は天より御身に与え給う万穀の精なり。ここから東に西銘という村がある。この村に炭焼太良という有徳の仁人がいる。我等は彼処に往て御身を待つ。御身も慕来るように」と言い残してかきけすように失せた。炭焼太良はひとり身で山端にに草庵を結び、常に炭を売って生計をたてていたので、その名を得たという。

真氏は万穀の精のお告げを受け入れず、夫との生活を続けた。とうとう真氏は追い出され、夫は他女を迎えいれた。この夫は後には貧窮して乞食になったという。

夫に追い出された真氏は、よりすがる術もなく途方に暮れていた。また、万穀の精が来て、「御身はどうして前に教えた所に参らないのか。彼の太良は今は貧賤であるが、陰徳あるものなので、やがて長者になる。太良と縁を結ばれれば二人の孝女を設けるべし。早く思い立ち給え」と言いすてて去ってしまった。

真氏はありがたき神の御告を黙止することもできず、隣婦一人を伴い西銘を目指した。途中、大雨に見舞われ雷といなびかりで立ち往生した。おりふし荒れたる草庵あり。立ち寄ると火を灯したあるじが現れ、打驚く真氏と問答を交わした。供人の「我らは野崎長井の里のもので西銘に用あり」との言に、太良は「不思議なことだ。我今先見た夢に白髪の翁が来て言うには、野崎長井の里に良娘あり。名を真氏という。大福の婦人なり。汝陰徳を好む故に、天より汝を助け給うと言って、荅の百合草二茎を我に与えた。花はたちまち開き匂い芬々で驚いて夢から覚めた。これは今ふたりの逢事のしるしである」と驚きをかくしきれずにいた。真氏は答える言葉もなく顔をあからめて立帰った。

太良は翌日野崎に出かけ、夢中の女を尋ね、良媒を頼んで奇縁を結んだ。太良は次第次第に富貴栄耀して、後には西銘の主となり、嘉播の親と名のった。

豊後の炭焼小五郎と宮古の炭焼太良の話をくらべてみよう。

第一の極めて貧賤、山中で一人で炭を焼く、ことは同じである。

第二の貴族の娘は、離縁（あるいは追い出）された娘。観世音の御告は、万穀の精（穀霊）。押掛け嫁は、良媒をたてて奇縁の嫁迎。縁結びには①初婚型、②再婚型がみられるようだが、再婚型は少ないらしい。宮古の話は再婚型である。

第三の水鳥に黄金投げ付けは全く見えない。伝承されていないと見るべきであろうか。

物語の一つの山である、というのに。
第四は全く語られていない。ふんだんにある石＝黄金を集めて長者になった経緯は具体性をもって語られるのに、宮古ではその片鱗さえ語られていない。
四つの要点のうち、共通しているのは第一の要点だけである。第二の要点のモチーフは同じだが、押掛け嫁となる貴族の娘が、離縁された娘に、観世音の御告が、万穀の精（穀霊）の御告に変化している。第三、第四の要点については伝承されていない。
柳田國男は、この炭焼太良の話に触れて背景にあった鉄のことを次のように述べている（柳田、前掲書、338 頁）。

> 荒れたる草の庵の炭焼太良が、忽ちにして、観望隆々たる嘉播仁屋となったのを、ユリと称する穀霊の助けなりとする迄には、その背後に潜んで居た踏鞴の魅力が、殊に偉大であったことを認めなければならぬが、しかも鉄無き此島［宮古島］に鉄を持込んだ人々は、謙遜にも自分の功労は之を説立てず、炭焼奇端の古話をそっと残して置いて又次ぎの或島へ、いつの間にか渡って往ってしまったのである。

炭焼太良は鉄を宮古島に持込んだ大和からの渡来人であり、西銘地方にその居を構えていた。島の娘と結ばれ子孫繁昌している。その繁栄の背景にあるのは、取りも直さず鉄器（へら・鎌などの農具）生産であろう。先に見た鍛冶伝来の事例と重なる。炭焼太良は大和渡来人であるにもかかわらず、宮古に定着し島の娘と結婚、長い年月がいつのまにか元来の「宮古人」とみられた一事例と考えられる。
宮古の「旧記」は、幸いに炭焼太良の時代を考える基を残している。いわゆる炭焼太良の系譜である。男子の継承を図にすると次のようになる。

> 炭焼太良（西銘嘉播（にすみがば）の親（うや））―長女思免娥（うむいめが）（二人の孝女を設ける穀霊の御告。次女は目娥月（めがつき））―目黒盛豊見親―真角与那盤殿―普佐盛―真誉（まよ）の子（ふぁ）―仲宗根豊見親。

と継承されていることになる。
このように見ると、炭焼太良は伝説上の人物というより、歴史上の人物の臭いがする。ともあれ、仲宗根豊見親は、炭焼太良の七代孫とされる。仲宗根豊見親は 1470 年代頃から半世紀近く宮古の主長を担った人物である。このことから推して炭焼太良は、1300 年代半ば頃の人物と考えられる。
鍛冶の伝承と深く関わる炭焼太良は、14 世紀の半ば頃、宮古に渡来し鉄を背景に西銘という地域を治めたのであろうか。西銘地域には島への出入り口として利用された、白川浜がある。この白川浜は宮古では歴史上の舞台であり、与那覇勢頭豊見親の中山出発の地、くばるぱ一按司兄妹の上陸の地、飛鳥爺謀計に倒れた地などのドラマがある。い

ずれにしても、後でのべるように、宮古の 14 世紀は多くの渡来人が出入りしていた時代と考えられている。人口も増加し、それを支える農耕の発展、農具の調達は欠くべからず課題になっていたのであろう。

伊良部島に漂着（あるいは渡来）した大和人が、長山に居住して農具を拵えて村人に与えたので、五穀満作、村人は豊かに暮らすことができた、という長山御嶽の伝承は宮古の社会状況をリアルなまでに伝えているのではないだろうか。いわゆる渡来人によってもたらされた鍛冶の技術は、宮古の社会を大きく変え、地域の主長（殿や按司）を生み出す要因となったのであろう。

5　「旧記」や歌謡に見える鉄器

西銘間切の主長となり成長著しい飛鳥爺（とうびとうりや）と、石原（いしゃら）村の主長思千代按司は、領有権をめぐる争いへと進展する。白川浜で弓矢の射比べをしてその決着を図ることが「旧記」にみえる（「宮古島記事仕次」、前掲書、68～70 頁）。飛鳥爺は西銘嘉播の親（炭焼太良）の次女目娥月の娘婿である。長女思免娥は他家に嫁いだので、嘉播の親は次女に婿をとり、西銘の主長を継承させている。嘉播の親は娘、孫娘と二代続けて婿に主長を継承させていることになる。

飛鳥爺に領域を侵される事態を憂慮した思千代按司は、「無双の弓取」と評判の高い起目翦（うきみぞり）殿を刺客として雇う。その報酬として「屋籠牛五疋」が支払われる。飛鳥爺と起目翦殿は、白川浜で五十歩隔てて「身の長け穴を掘り」首だけ出して「髻に一寸のしるしを挟み」それを射当てる勝負である。起目翦殿の計略にはまった飛鳥爺は「大の狩俣」で両眼を射られる。狩俣とは雁股のことで、ふたまたに開いた鉄製のやじりである。雁股を所持していたということは、渡来人そのものか、あるいは渡来人と深い関わりを持つものであろう。農具を作り住民に与えたという鍛冶の伝承からすれば、雁股のような武器は異質な存在であるように見える。

起目翦殿も飛鳥爺の従兄弟、糸数大按司の計略にはまり、「倭人」の「剣」で首をはねられてしまう。飛鳥爺の妻於母婦（おもう）の従兄弟にあたる目黒盛も土地の領有権争いで、いっせいに放たれた矢を「剣」で打ち払っている。また、伯母を訪ねた折、その夫の浦天太が、鴨居の上においた目黒盛の手を「釿（手斧）」で切ろうとしたが、目黒盛はすんでのところで遁れたという。

雁股や剣などの武器あるいは手斧は、宮古で作ったというより、渡来人によって持ち込まれたと見るのが順当であろう。

先述した「鍛冶神のニ゜リ」に、うぷふき（大鞴）、うぷかんか（鉄を鍛える金敷）、うぷつと（大鎚）、つとがま（小槌）、うぷばす（鉄の箸）などの鍛冶に関する道具が歌われている。これらの鍛冶道具が船に積み込まれ、大和島から沖縄島そして宮古島、多良間島まで運ばれ鍛冶が広まったと歌われる。

「狩俣祖神のニーリ（四）」では、井戸掘りの相談があって「後井（くすかー）」を掘った情景が歌われている。その井戸掘りに「まいつ」と「ぶーな」という道具が使われている。まいつとは手斧、ぶーなとは大斧、大鎚のことである、（稲村賢敷『宮古島旧記並史歌集解』至言社、復刻 1977 年、315 頁）。「祖神のにーり（五）」でも船を造る道具として「まいつ」と「ぶーな」が登場する（稲村、前掲書、328 頁）。歴史上の人物仲宗根豊見親も歌われ登場するので、時代は 15 世紀後半以降である。この時代の鉄器は手斧や大斧などが、主要な道具であったことが垣間見える。

池間島の船漕ぎ歌に「池の大按司豊見親の娘まつさびがあやぐ」というのがある。この歌の中に八重山の大木で船を造る様子が見える。多くの大工が寄り集まり「やまとかに　まいつ／やしろぶーぬ　とり」と歌う。歌の意は「日本から伝わる鉦や手斧等／山城から来た大鎚取り」と解釈されている（稲村、『宮古島庶民史』56 頁）。このあやぐでは「ぶーぬ」とあるが、先のニーリの「ぶーな」と同意であり、「やまとかに」と「やしろぶーぬ」は対句である。大和（日本）から伝わる鉄の手斧や大斧（大鎚）で、うぷぎ（大木）を伐採して造船した、と歌われる。

「旧記」や歌謡に見られる鉄製の道具は、手斧や大斧（大鎚）が主流であり、他に雁股や剣などの武器もある。剣といえば、仲宗根豊見親が尚真王に献上した「治金丸」、目黒盛豊見親に関連する「東原御嶽の刀剣」、平家伝承に係わる「伊良部家の刀剣」などがある。これらは大和から伝わるもので、渡来人によって持ち込まれたものと見られる。これらのことが鍛冶の伝承とどのようにリンクするのか。「旧記」も歌謡も伝承の世界に押し込んでおいていいものか。朝鮮人の「見聞記」と併せて考えてみたい。

6　朝鮮人が見聞した先島の鉄

朝鮮・済州島人は進上の柑子を受け、楸子島に向かったが、暴風に遭って漂流した。漂流 14 日、10 人のうち 7 人は病死あるいは溺死した。3 人は与那国島に漂着した。1477 年 2 月である。彼らは与那国島で半年、祖内島（西表島の集落）で 5 か月、波照間島、新城島、黒島、多良間島、伊良部島、宮古島でそれぞれ 1 か月ばかり滞在、琉球国に送られ、薩摩、博多を経て、79 年 5 月帰郷した。2 年余のうち 1 年余を八重山・宮古で過ごしている。彼らの見聞記が『李朝実録』に収録されている。与那国島での体験見聞を中心に記述され、他の六島は特異と見られた点を記述している。鍛冶に関係すると見られる項目にしぼって拾うことにする（池谷望子・内田晶子・高瀬恭子『朝鮮王朝用実録　琉球史料集成』訳注編、榕樹書林、2005 年、228～235 頁、他）。

与那国島では、

一　鉄冶有り。而れども耒耜を造らず。小鍤を用いて田を剔（えぐ）り、草を去りて、以て粟を種

う。

鍛冶＝かじや。耒耜＝長い柄のすき。小鍤＝小さなすき。へらか？

一　草及び禾を刈るに、鎌を用い、斫(き)るに斧・錛子を用う。又、小刀有り、弓矢・斧戟無し。人、小鎗を持ち、起居に於いても舎(はな)さず。

錛子＝ちょうな、手斧。斧戟＝戟はほこ。両側に枝のあるほこ、先が三つまたのもの。

祖内島では、

一　山に材木多し。或いは輪載し、他島に貿売す。

宮古島では、

一　炊飯するに鉄鼎を用う。足無く、釜に似たり。乃ち琉球国より貿易するものなり。（与那国島には釜鼎無しとある）。

朝鮮人が 15 世紀末の宮古・八重山には、鉄冶が存在、小鍤（へら？）あるいは鎌などの農具が作られ、大斧や手斧が用いられていたこと。他に小刀、小鎗があったこと、また、鉄鍋？で炊飯していたこと。この記録によって、先に見た鍛冶の伝承が現実味をもって迫る。とりわけ農具のへらや鎌、万能とも思える手斧や大斧などの鉄器は多くの資料で散見されたものである。

炭焼太良をめぐる鍛冶の伝承は、宮古では単なる伝承にとどまらず、その系譜を見る限り歴史の舞台へと押し上げているように見える。しかし、この時代（14 世紀後半以降）の製鉄遺構が確認されていない現在、宮古で作られた鉄製品とはなりきれない。鉄鉱資源のない宮古では尚更のことである。

宮古に今も残る高腰城の切り石積壁、狩俣の石門、野原嶽の霊石、大嶽城の前ヌ井、後ヌ井、狩俣の後井、あるいはミャーカ（巨石墓）などは、ふんだんに登場する手斧や大斧がなければ出来ない石造り遺構である。宮古の人々はこのような鉄製品をどのように調達したのだろうか。

鍛冶の伝承だけでは限界はあるものの、渡来人によってもたらされた重宝な鉄器であったことは間違いなかろう。各地に見られる加工した石の遺構はそのことを証左している。渡来人が宮古に定着し、宮古人と融合することで生み出された石造文化ともいえよう。そのように考えた時、炭焼太良や各地の御嶽に残る鍛冶伝承に見られる出来事は、宮古の基盤作りに大きな貢献をしたことが確認される。

柳田國男が「島の文化史の時代区画としては、鋤鍬の輸入は或は唐芋よりも重大であった」（柳田、前掲書、338 頁）と強調するのも肯ける。この場合鋤鍬という農具であったかどうかは一応おいておく。一方、稲村賢敷も「この鍛冶神の渡来を宮古の生産革命と称し、重要視するものである（稲村、前掲書、147 頁）と同様に強調する。しかし、稲村が理解するように 14 あるいは 15 世紀の時代、「日本および沖縄からの渡来人によって鍛冶の技術が伝わり、鉄製農具および漁具が制作されて一般に普及するようになった」（同前、147 頁）という後半の「製作されて」が、宮古でいうことなら首を傾げざるを得ない。

おわりに

鍛冶にまつわる伝承を乱雑にとりあげてみた。伝承の世界を全面的に否定するつもりはない。伝承にもそれなりの背景があることは承知している。ただ、伝承と歴史がどこで結びつくかは難しい問題である。鍛冶の伝承となる背景について若干触れておいたが改めて述べることでこの稿を終える。

博多の商人を中心とする勢力が、南宋の白磁、あるいは長崎の滑石製石鍋、徳之島のカムィヤキ、中国の褐釉陶器などを南島に持ち込んだ。このことによって長きに亘る沖縄・先島の先史時代は終幕、新たなグスク時代が幕を開けた。宮古・八重山の南琉球文化圏が、沖縄・奄美の北琉球文化圏と一つになったことでもある。またたくまに与那国、波照間まで新しい文化は広まった。いわゆる北を中心とする渡来人が広範囲に活動したことを意味している。12、13 世紀の頃、宮古にはわずかな人々が暮らしていた（図 1）。これを鍛冶伝承の地と重ね合わせると（図 2）、鍛冶の技術を持ち込んだ渡来人の時代が垣間見える。14 世紀という時代は、宮古の人口が急激に増えた時代、かつ躍動的な時代でもある。自然の人口増加だけでは説明つかない程である。渡来人の定着、島の娘との婚姻、子孫繁栄の図式が見える。この状況は「旧記」をひもとけば散見できる。

渡来人は鉄という新しい文化を運んできた。炭焼長者の話に見られるように、鉄は富の象徴であり、琉球文化圏全体に広がりを見せる。渡来人の持たらした鉄器によって井戸の開削、石門の築造、みゃーかの建造などなど可能になった。「文化革命」（稲村賢敷）とでもいうような状況である。

谷川健一は、鍛冶伝来の時代について「鍛冶の技法と鉄器は日本から南島にもたらされたものであり、それには 14 世紀の中葉を皮切りに活躍を開始した倭寇が一役買っていたにちがいない」（『谷川健一全集 5　沖縄 1』富山房インターナショナル、2006 年、307 頁）と倭寇をからめて考えている。

炭焼太良の登場に触れて、その系譜を考慮した上、14 世紀半ば頃と推測した。このことは、渡来人が宮古に定着した一つの事例であるとした。炭焼太良以外にも多くの渡来人がいたことはその通りである。おそらく鉄を背景に後に島の主長にまで上りつめた人が、炭焼太良と深い関係にあったことから、他の渡来人よりも色濃く残されたのであろう。五つの御嶽に伝承された渡来人は、島の主長と結びつかなかった故か、地域の鍛冶神として崇められた。うがった見方をすれば、渡来人の争いに負けたのかも知れない。しかし、このことが鍛冶伝承の重さを否定することではない。

宮古における鍛冶の伝承は、14 世紀という躍動感あふれる時代を背景に、渡来人と深い関わりの中で生み出されたものであろう。渡来人は島の有力者と結びつき、鉄を背景にその裾野を広げたのであろう。鉄器を生産するまでには至らなかったであろうが、渡来人を介して鉄器あるいは農具などが持ち込まれ宮古の発展に寄与したことは想像に難くない。

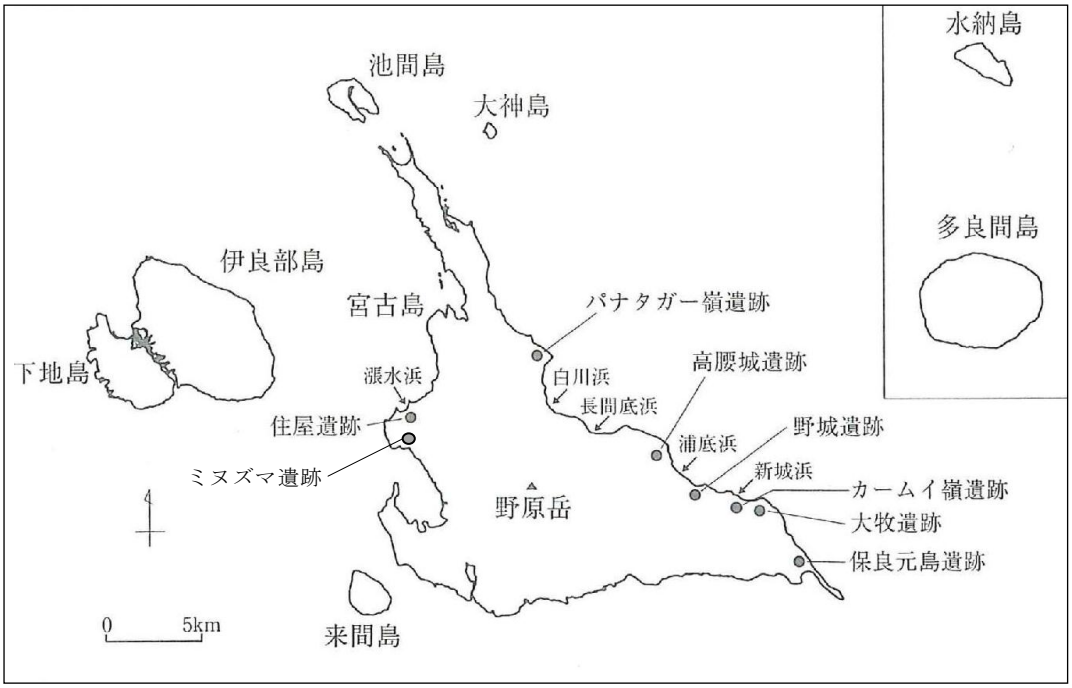


図 1　12、13 頃世紀頃の遺跡

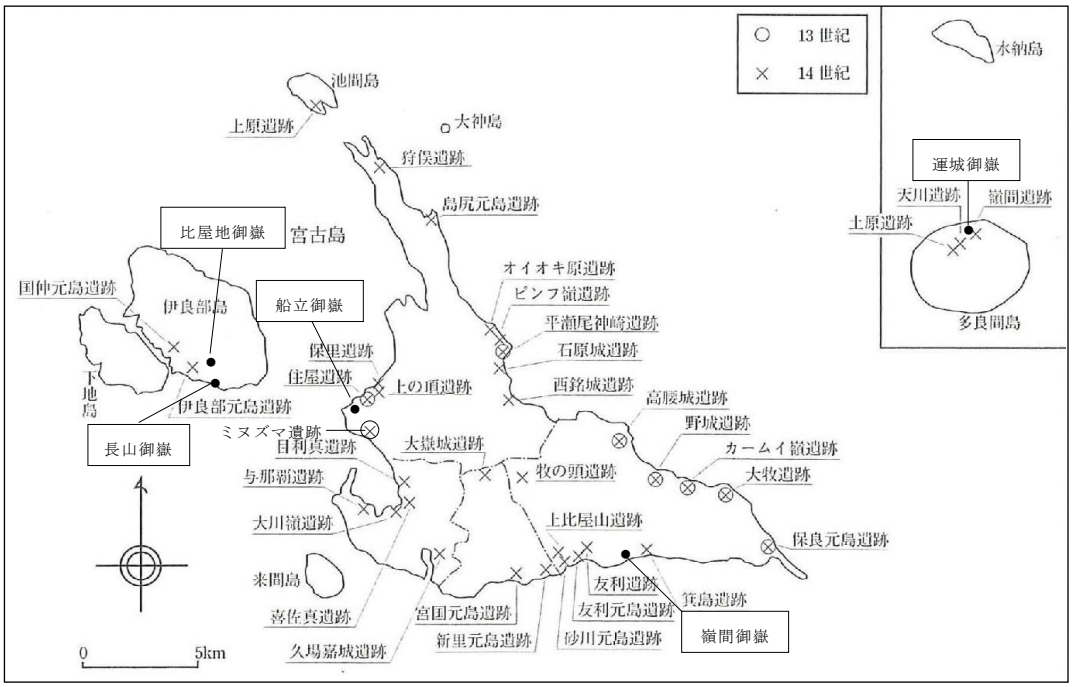


図 2　14 世紀頃の遺跡